

2021 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	西岡伸紀
研究テーマ	教職員による学校安全点検のプロセスを児童生徒が効果的に学習するためのプログラムの開発

<助成研究の要旨>

学校での事故防止には教職員による校内の日常的、定期的な安全点検が必要である。点検は、子供達に注目されることはほとんどなく、万全の実施が当然とされ、負担に思われる場合もあるが、安全点検は有効性の高い教育内容である。なぜなら、子供達の身近な学校環境における危険の発見、報告、改善等が教職員により実施されており、そのプロセス、すなわち視点やノウハウ、経験等を踏まえた安全点検に関する指導は、危険の発見や予測、回避等に有効と考えられる。ただし、安全点検に関する指導の実践例はほとんど見られない。したがって、子供達が安全点検を学習するプログラム開発のためには、教職員と子供達が安全点検やその学習可能性、有効性等をどのように捉えているか、安全点検の指導や受講の経験、校内の危険の発見の経験、発見時の教職員等への連絡などの情報が必要である。

本研究では、「教職員による学校安全点検のプロセスを小・中学生が学習する」プログラムを開発するための基礎的情報を得るために、①教員に対して、学校安全点検の実施状況、点検に関する子供達への指導、指導の可能性、それらの関連要因を明らかにすること、②児童生徒に対して、学校安全点検への参加、意識、危険予測、それらの関連要因を明らかにすることを目的とした。

そのため、研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（進行中）を実施してきた。

研究Ⅰでは、小学校教員 10 人を対象に、児童による安全点検の実践例、教員が点検の際に使用するノウハウ、安全点検に関する指導の有無、指導する場合の内容と方法等についてグループ・インタビューを実施した。

その結果、児童は学校の安全マップづくり（危険の発見）、教室内の持ち物の整理、画鋲の落下、廊下の結露の解消等を行い、一部児童は児童委員会として校内の各所の安全点検を実施しており、指導内容の一部が示唆された。ただし、点検指導の特定時間の設定はされていない。また、教員の安全点検のノウハウとしては点検項目の遵守等があるが、それらを児童に直接指導内容とすることは困難であった。

研究Ⅱでは、小学校 5, 6 年生（計 210 人）、中学校 1～3 年生（計 268 人）を対象に、2021 年 8～9 月に、安全点検やマップづくりの指導の受講経験、安全点検の参加経験、校内の危険への気づき、危険発見時の連絡、安全点検に対する意識等について質問紙調査を実施した。

その結果、マップづくりの授業の受講経験、安全点検の指導を受けた経験は、小・中学生とも 20%程度と少なかった。しかし、校内のいずれかの場所の点検への参加した経験は小 41%、中 48%であり、少なくなかった。また、校内環境における何らかの危険に気づいた経験は小 60%、中 54%であり、意外に多かった。さらに、このような気づきは、安全点検の参加経験があるほど、安全点検に関する指導の受講経験があるほど高くなった。また、ほとんどの小・中学生が安全点検に関心や必要性を感じており、参加意欲も高かった。したがって、安全点検の指導や参加経験、危険予測の授業等により、危険への気づきが高まると期待できる。一方問題は、危険を発見した場合の教職員等への連絡が 1/3 程度しかされていないことである。教職員等への連絡を促す要因は安全点検に対する肯定的意識であったが、関連は弱く、意識向上だけで連絡を促すことは期待できない。連絡の有用性や必要性、連絡の仕方などの指導が必要であろう。加えて、子供達から連絡された場合に教職員側が肯定的に受け止めたり、危険の軽減策を講じたりして、連絡の有効性を児童生徒にフィードバックするような教員側の態度や体制も必要と考えられる。

研究Ⅲでは、教員対象の質問紙調査により、安全点検に対する考え、点検や危険予測に関する指導状況、子供達の安全点検能力等に関する情報を得て、結果をプログラム開発に活用する。研究Ⅲはコロナ禍で開始が遅れたため、現在調査を継続中であるが、結果が出揃い次第、指導者の立場からの情報をプログラム開発に活用する。